

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第59回放送の概要 (2013年1月26日放送)

パーソナリティ

さくら (安本久美子)
タロウ (佃 由晃)
なかちゃん (中嶋邦弘)

コアラさんの地域瓦版

アコちゃん (三木文子)



ミキサー

門ちゃん (門田成延)
一ノ瀬悟

相談役

わだかん (和田幹司)

会計

小山俊則

1. オープニング

今日から明日にかけて寒さが更に厳しくなりそうです。24日の長期予報では2月は例年並み、3月は例年より低いようで、桜は遅いかも知れません。

2. ゲストコーナー (1): 兵庫県神戸県民局 山本康典さん

山本さんは昭和27年12月25日生まれ、神戸高校、神戸大学卒業です。昭和39年に東京オリンピック、昭和45年(高校3年生)に万博があり、中高は日本が日の出の時の勢いの時代で物がなくて困った思い出はない。ということもあり高校時代の思い出は少ない。ユニークな先生の思い出として、数学の先生は黒板に書いたことについて1カ月後の復習の時に、黒板のこの位置に書いたことを覚えていないのかと言って怒っていたことや、倫理社会の先生は、大学入試でこの科目はとらないと思うので通史はやらない、プラトン、アリストテレス、カントの3人だけ1年かけて教えていたことなど。夏休みの宿題は、プラトンの「ラケス(勇気)について」であった。国語の先生は、自分が若い頃に志賀直哉の暗夜行路が同時並行で掲載されていた。それがものすごく楽しかったので、目先の受験勉強にとらわれず本を読みなさい、読むのは現存の人が良いと言われた。

県民局では広報に13年、議会事務局に7年、神戸県民局に6.5年在籍した。最初の地方博は昭和56年のポートピア博、県の最初は昭和60年のくにうみの祭典。これは大鳴門橋が昭和60年6月に完成するのを記念して、同年4月から半年間開催した。博覧会では、広報・報道を担当。県としては初めての博覧会で、結果的に休んだのは1年間で2日間だけ(1月1、2日)で、帰宅は毎日24時であった。今の生田庁舎の6階に実行委員会事務局があった。当時、PRのため色んな人に会えた。夏目雅子さんが映画撮影で洲本に来た時に会い、最初のコマーシャルには洲本出身の大地真央さんに出演してもらい、テーマソングは4人組のサーカスにお願いした。準備に1年間、本番で半年間、残務整理半年で計2年間博覧会の仕事をした。

震災当時は報道係長で、平成6年5月に全国植樹祭があり、但馬に天皇陛下がお越しになるので、1年前から道路整備などが始まり、コースと取材位置を写真記者協会と相談した結果を宮内庁と調整したりした。植樹祭が終わると1年の仕事は終わったと言う気分になり、少しのんびりしていた所、翌年1月17日に震災が発生した。この日は娘の誕生日であった。ある時、小学校の先生から宿題で誕生日にどんな事があったか、どんな偉人が生まれたか亡くなったかを調べなさいと言われ、尾崎紅葉の金色夜

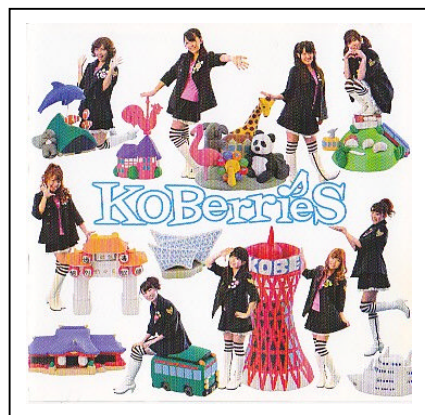
又で貫一がお宮を蹴飛ばした日であることが分かった。娘は恥ずかしがって言われへんと言っていた。

震災当日は灘区に一人住まいの親との連絡が取れず、出勤出来ないと考えていた。しかし職場との連絡が取れ、報道は誰も来ていない、新聞社が怒っていると言われ出勤した。西明石に住んでいる部下は2時間かけて自転車でやってきた。マンションが被災したようで翌日は出勤しなかった。1月19日は災害救助犬が、20日は村山総理が長田に来られ、事前に取材位置を決めていたが、当日急にルートが変わり大混乱になった。31日は天皇陛下がお越しになり、このあたりは殆ど寝ていなかった。

議会事務局は、総務課（総務、経理、人事）、議事課（県会、委員会運営）、調査課（政務調査）、図書室がある。議会事務局は、時間の面では議員が来る日数は限られているのでそれ程激務ではないが、反面、議員と話をしたり飲み会の付き合いが出来ない、言われた時にすぐにやれない人にはしんどい仕事である。議会広報の仕事の時にPRポスターの原案を5社より提案された時、広報委員会で選ぶ議員の感覚は全く違っていた。広報委員は会派の重鎮、取りまとめは副議長で、世代によって広報ポスターに対する感覚が異なるなあ、と大変勉強になった。

3. ミュージックコーナ: コウベリーズ 「絶対最後乃恋宣言」

コウベリーズは神戸の御当地アイドルで、9区から9人選ばれている。当初よりめっちゃくちゃかわいくなっている。ダンスも歌もとても上手になっている。2枚目のCDは絶対最後乃恋宣言です。



4. ゲストコーナ(2): 兵庫県神戸県民局 山本康典さん

神戸市の人口(154万人)は兵庫県全体(560万人)の4分の1以上で、県税収入も全県で5800億円に対し、神戸市からは2800億円となっている。このようなことから、政令指定都市であるという理由で神戸市は全く関係ないとは言えないので、県も神戸市民のために色々取り組んでいることを知ってもらう必要がある。そのような考えで平成13年に神戸県民局が新しくスタートした。神戸市との棲み分けについては、法律で決まっているものは問題ない。例えば、道路は市、川は県である。従来は縦割り行政であるため、土木や農林に何かを頼むと、従来はそこで解決できず本庁に出向く必要があり、時間がかかっていた。今は現地解決型に変わり、県民局長が責任を持ち一元管理が出来るようになった。市民にとっても対応が早くなったと思う。

神戸県民局の要員は、正規職員が320名、嘱託他が90名である。土木と県税関係は鷹取に事務所がある。例えば防災関係業務についての神戸市との棲み分けは、国の中央防災会議で巨大津波による浸水範囲を検討し、県としてはもう少し具体化し、これを受けて神戸市はさらに具体的な対策、すなわち堤防を越えてきた場合に避難できるか、避難場所をどうするかなどを地域コミュニティと相談しながら決めている。県は指針・方針及びデータを出すことになる。中央防災会議の想定は粗いので、県は詳細な検討をし、神戸市に提示している。今は災害要援護者の避難対策の方針について検討している。神戸市は進んでいるので、県が方針を出す前に地域と相談しながら対策を検討している。南海、東南海地震は30年以内に70%の確率で発生すると言われていたので、早く対策をとる必要がある。鴨長明の方丈記によれば1180年頃に天変地異が起り、大火事で都の3分の1が燃え、竜巻が起り、大飢饉が続き、元暦の大地震があった。人民は神仏の崇りと言っているが、時が経つと口にもものぼらなくなっていると記述している。これは現在も同じであるがそれではいけない。神戸市における防災コミュニティの活動は進んでいる。神戸県民局は区役所レベルとも仲良くやっている。知事と市長の仲が良く、昔に比べればかなり改善されている。

神戸県民局の取り組みは4つの柱にまとめられる。即ち①神戸市民との対話と協同の推進、②個性豊かな神戸の魅力発信と地域産業の振興、③市民の力を生かした住みよい神戸づくり、④豊かな自然と共生した安全な神戸づくり、である。例えば、神戸の魅力発信と地域産業の振興については、これを進めるためにどのような事業が必要かを県民局が上から決めるのではなく、地域の人と一緒になって対話と協働を進めながら決めていくことになる。具体事例として「神戸地域ビジョンの推進」については、これまでは行政計画として担当部署が先生方を集めて審議したものであったが、地域ビジョン推進では、市民、団体が中心となり神戸の将来のあるべき姿、方向性を描いていこうというものである。行政計画は責任を伴うので無難なものになってしまうが、ビジョンでは縛りを少なくし、平成13年から取り組んできた結果を未来予想図として再整理・検討し、ビジョン委員130名に提示、実現に向けて取り組んでもらいたいと思っている。県民局としては、地域を良くするのは市民であり、力を発揮するのは市民の属する団体であることから、130名がネットワークを組み、地域に持ち帰り活性化に取り組んでもらえればと考えている。そのための予算は出していきたい。(130名の委員のひとりであるわだかんさんとしては、自治会活動などで意識を持った人が委員になっているのでビジョン委員会の議論を生かせること、長田区役所とはよく議論するが神戸市とはないのが現状で、神戸県民局が神戸市全体を見ているので今のところメリットと感じているとのこと)

もう一つの具体事例として地域支援の「県民広場交流事業」について、16年からモデル事業を始め、18年からスタートしたもので、法人県民税の超過課税として規模の大きな法人からは0.8%余分に徴収し、積み立てた原資が120億円ある。1小学校区毎に拠点を整備し、活動してもらうことにしている。全県で850か所あるので、1地域当たり1300万円になる。原則として、1000万円は整備費用に、300万円は5年間の活動費に充ててもらうことにしている。本来、市の施設である地域センターに金を出すのはおかしいが、コミュニティの活性化のために活動してもらうための改修であるため問題はない。県民みどり税も防災のための植樹と都市緑化に使ってもらっている。

5. なかちゃんの「こぼれた話こぼれなかった話」：今年の「ぼうさい甲子園」で受賞した学校の取り組み

- (1) 今年もHAT神戸の人と防災未来センターは、毎日新聞社と一緒に、「1.17 防災未来賞“ぼうさい甲子園”」という全国の防災に取り組む小中高大などの取り組みのコンテストを実施し、1月13日(日)に表彰式・発表会を行いました。たろうさんが参加して聞いて来られました。
- (2) 「ぼうさい大賞」の小学生部門では岩手県の宮古市鍬ヶ崎小学校の観光リーフレット作りに取り組む児童たち「歩みだそう みらいへの一歩～命を守った知恵をもとに～」。中学生部門では、徳島県の徳島市立津田中学校の地域の事前復興まちづくり計画をパネルにまとめた生徒たち「繋がり、地域に貢献する防災学習」。高校生部門では、岩手県立宮古工業高校の全国産業教育フェアで来場者に説明する生徒たち「類似津波実演会」。大学生部門では、岩手県立大学学生ボランティアセンターの自転車で大学周辺をパトロールしているメンバー「いわてGINGA-NETプロジェクト」が受賞しました。

※鍬ヶ崎小学校も、日頃の防災教育への取り組みを活かして、当初の避難所を危険と判断して、適切な避難行動を展開して全員助かった学校です。

- (3) 「優秀賞」の小学生部門では、岩手県の釜石市立釜石小学校の「自ら救った命だから あなたのために～釜小ぼうさいの日の取り組みを通して～」。中学生部門では、宮城県気仙沼市立階上中学校の「私たちは未来の防災戦士～自助、自助共助、自助公助の学びとつながりの大切さを通して～」。高校生部門では、福島県立磐城高校天文地質部の「津波による被害状況と今後の防災対策」。

※NHKテレビで放送された、釜石小学校の生徒がほとんど下校済みだったにも関わらず、防災教育を活かした行動で、自分や家族を無事に避難させた、いわゆる「釜石の奇跡」と賞されています。本人達は、「習ったことを実際にやっただけなので、奇跡ではなくて実績です」と

インタビューしてたのは、強烈な印象でしたね。

- (4) 「奨励賞」の小学生部門は、新潟県の糸魚川市立根知小学校の「ジオパークの大自然と向き合う地域防災教育」。中学生部門の和歌山県の印南町立印南中学校3年生総合的な学習津波研究班の「安政印南の奇跡を再び 150年前の先人の知恵と現代科学の成果を活かして〜」。宮城県の女川町立女川第一中学校第2学年社会科の「1000年後の命のために〜豊かな海に感謝する日まで〜」。高校生部門は、千葉県立東金特別支援学校の「防災コミュニティ&コミュニケーション〜北之幸谷（区自治会）から山武郡市（周辺都市）へ防災ユニバーサルねっとを広げよう」。
- ※女川第一中学校の生徒が、昨年7月に仙台で開催された世界約80の国や国際機関が集まって災害対策を話し合う「世界防災国際会議 in 東北」で、自分たちの体験を踏まえた津波対策などの教訓を提言、基調報告をおこなった。
- (5) 「はばタン賞」や「だいじょうぶ賞」のほかに、今年からは、津波避難訓練や津波対策に対する優れた取り組みへ「津波ぼうさい賞」、教科教育における優れた取り組みに「教科アイデア賞」、過去数年にわたる継続的な防災教育活動をたたえて「継続こそ力で賞」が儲けられました。
- (6) ちなみに、「津波ぼうさい大賞」では、徳島県的美波町立木岐小学校の「ワイキキっ子 いざ高台へ」。高知県の四万十町立興津小学校の「明るい未来へ一歩前進〜助け合い、少しでも早く逃げて、命を守ろう〜」。石川県の能登町立小木中学校の「自分たちの地域を自分たちの手で守ろう」。千葉県立長生特別支援学校の「備え、積み重ね、守る〜津波を知り、津波から命を守る〜」。兵庫県立家島高校の「考えたことある？学校への道」。徳島県立徳島科学技術高校防災クラブの「アイデアものづくりと各種無線の活用で、地域と連携した考え、行動する防災」が受賞しました。
- (7) 全般的にみて、東日本大震災など阪神以後の大地震の被災状況と、迫り来る東海・東南海連動地震と大津波の予測、地域での防災取り組みの重要性などが広く認識されるようになって、各地での取り組み、特に、大きな被害を受けて復興途上にある東北3県など、太平洋沿岸地域の学校での防災教育が充実してきています。また、災害時避難弱者への配慮も進展して、今回の「ぼうさい甲子園」でも、特別支援学校の取り組みが受賞しています。
- (8) 日頃から学校や地域で取組まれる優れた防災教育・活動は、生徒・児童だけでなく、家族や地域住民の防災感覚を向上させます。毎年、全国の学校から、「ぼうさい甲子園」に挑戦・応募してきます。一歩進んでいた兵庫、神戸の学校の取り組みも当たり前になって、今年あたりから他地域が追い付き追い越せの勢いです。

6. あこちゃんの地域瓦版

ユウカリプタスの第7回定期演奏会が2月24日（日）に開催されます。神戸朝日ホールで14時に開演します。翌25日（月）は90陽会の津村美姫さんと89陽会の出口智子さんが松方ホールホワイエコンサートに19時に出演します。前売りは1200円でコーヒ付きです。

7. 来月のゲスト

来月は兵庫高校総合科学類型の生徒さんにお越し頂きます。

番組に対するご意見、ご感想はこちらまで：yuukarinikanpai@gmail.com